With

事業報告書2022.3 - 2025.2

もくじ

宝塚にシングルマザーを守る“場所”が必要だと感じました。……P02

シングルマザーが安心して過ごせ心身を安定させる場所“With” ……P03

入居者を直接支える ……P05

さまざまな関係先とつながる ……P07

持続可能な運営を目指す……P09

コラム1:Withを運営するコストについて ……P11

コラム2:全国の母子家庭の状況について ……P12

ステークホルダーマップ ……P13

Withとかかわる ……P15

With photo gallery ……P21

評価委員さんからのコメント ……P23

Withのこれから……P25

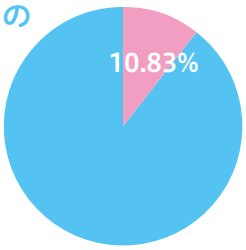
宝塚にシングルマザーを守る“場所”が必要だと感じました。

宝塚市の調査から見えた課題

空き家対策に取り組む必要がある。

2018年の宝塚市内の空き家率は、全住戸107,270戸中空き家11,620戸（空き家率10.83%）となっており、全国平均より低いものの、市内山側に広がるオールドニュータウン住民の高齢化に伴い今後も増加傾向にあるため、空き家対策に取り組む必要があります。

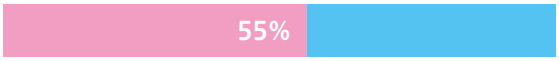
宝塚市内の空き家率



ひとり親家庭の相対的貧困率が高い。

市内の子どもの相対的貧困率が7.4%（全国13.9%）のうちひとり親家庭においては、相対的貧困率が55%を占めています。貧困率の高さから家計に占める割合が高い住居費が大きな負担になっていることや、環境が劣悪で安価な狭小住宅に居住している可能性があるため、居住にかかるひとり親世帯の負担軽減に取り組む必要があります。

ひとり親家庭の相対的貧困率



事業から見えてきた課題

ひとり親家庭を受け入れる住居が必要。

宝塚NPOセンターが、2021年7月から実施している「ひょうご居住支援団体発掘・育成支援事業」。その中で、居住困難者（母子家庭含）が物件を探す際に「保証人がいない」「緊急連絡先がない」という理由で入居を拒まれることがあるため、保証人・緊急連絡先がなくともひとり親家庭を受け入れる住居が必要であると感じました。

母親の安定した収入と子どもが安心して育つ環境が必要。

宝塚NPOセンターが、2021年10月から実施した「宝塚市女性のための伴走型就労支援事業」では、4ヵ月間の就労相談希望者56名のうち8名（14%）が母子世帯となっている。

全員が非正規雇用であり不安定な状況下で子育てを行っているため、母親の安定した収入と子どもが育つ環境が必要であると感じました。

宝塚市内の空き家を活用し、シングルマザーが安心して暮らせる住まいをつくることで、母子の自立を支援し、安定した生活を目指す。

シングルマザーが安心して過ごせ心身を安定させる場所“With”

宝塚市内在住、あるいは宝塚市に転居を希望する“非正規雇用で働く母親とその子どもで構成されているひとり親世帯”を対象にしたシングルマザーハウスがWithです。
立地は、最寄り駅から徒歩圏内に、保育所・小中学校が隣接する子育てがしやすい地域を選びました。空き家集合住宅を一括で借り、全面的な内装工事と耐震工事を行っています。

イメージイラスト

Withはこんな場所です

- 子どもの健全な発育と学習スペースを確保できるように2DK（40㎡）の広さを確保。
- 居室と他に地域のコミュニティスペースを１部屋設け、地域と母子世帯との繋がりを育み、母子世帯への理解を深め地域の一員として支援する仕組みづくりを構築。
- 入居者にキャリアカウンセリングを実施し、ライフキャリアプランを考え伴走型支援を実施する。
- 収入の安定していない居住者のために地域の企業から食品提供を受け、共同冷蔵庫に保管するなど生活面の支援も実施する。
- 緊急な電話相談窓口を設け、生活に寄り添う支援を行い、公共的支援の窓口の紹介が必要な場合は行政とともに支援をする。

OPENまでの流れ

休眠預金申請の予算立てのため物件を探していました。古いアパートを１棟借りたいと思い、不動産屋に相談したところ「そんな物件なら、更地にして売っている」と言われ、半ば諦めていました。大家業をされている木本さんにダメもとで相談したところ、自宅の隣に古いアパートがあると教えてもらいました。木本さんがすぐに大家さんに掛け合ってくださり借りられることになりました。ところが、予算を立てているうちに大家さんが提示された金額では、全く採算が立たないことがわかりました。「人助けだと思って、もうけを考えたらいかん」と木本さんが大家さんに一言伝えてくださってWithが実現しました。
古い物件なので、耐震化できる建設会社にリノベーション工事を依頼しました。ここでも、「これは社会のためになる仕事だから」と社長が随分と無理をして聞いてくださいました。

Withを取り巻く環境について

入居者を直接支える

居住するひとり親家庭の“自立”を目指してきめ細やかな支援を行なっています。

就労面の支援	入居後１か月以内に就労相談を必ず実施し、すぐに職に就いてもらうようにサポート。 就職決定後も定期的に連絡を入れ、離職の防止を行いました。
食料面の支援	生活協同組合コープこうべの協力により、廃棄する賞味期限内の食品を週２回提供いただき入居シングルマザーに提供しています。コミュニティルーム（名称：ただ居間）に設置している共同冷蔵庫に保管しています。
心理面の支援	定期的に臨床心理士がシングルマザーの話を聞くようにしています。最初は毎月でしたが、就職が決まり母親たちが多忙になったため、現在は3ヵ月に1回程度になりました。

→詳細はP05

さまざまな関係先とつながる

企業とつながる

Withの活動に共感をしてくださった企業から、日用品やパンなどをご提供頂きました。コミュニティルームの本棚に設置する本を社員の皆さんに声をかけ、100冊ほど集め届けてくださることもありました。

コミュニティ（地域）とつながる

宝塚市と連携し、「要保護児童に対する支援協定」に基づき、学校や宝塚NPOセンターと協働で子どもたちの課題解決に取り組んできました。地域住民との連携を深め、コミュニティルームを開放してイベントを開催。そのつながりで「子ども食堂」を始めることができ、地域の子どもたちに食料を届けるハブ機能も担うようになりました。

大学とつながる

シングルマザーと子どもの育ちに関心のある教育学部や、建物の活用に関心のある建築学部、ソーシャルビジネスを学ぶ社会起業学部など、多くの学生が関心を持って見学に来られました。

→詳細はP07

持続可能な運営を目指す

お金を工面する

この事業を自立させていくには寄付や助成金にばかり頼るのではなく、資金が回る仕組みを考えなくてはなりませんでした。

つながりをつくる

シングルマザーハウスの運営では、これまで私たちが出会うことのない方々とつながることができました。

行政を巻き込む

「私たちができること」と「行政に相談し制度を活用すること」の見極めが重要でした。

チームで取り組む

この事業が宝塚NPOセンターを1つにしてくれたように思います。

→詳細はP09

入居者を直接支える

入居者が安心して暮らせるよう、Withでは4つの角度からサポートに取り組みました。

住まいを支える

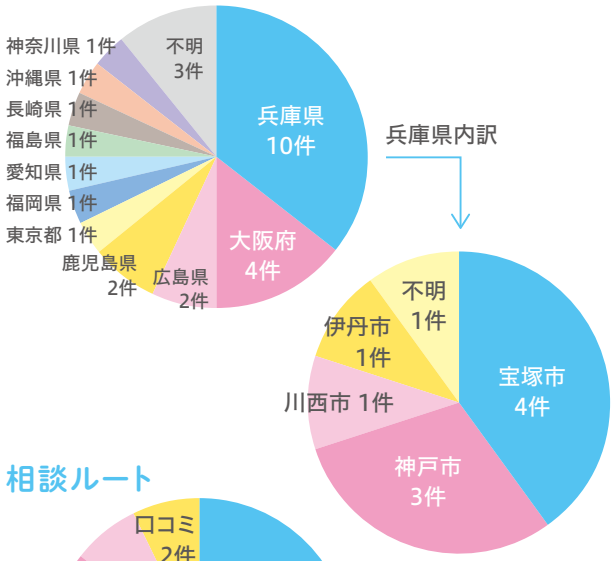
お互いに事情を理解している者同士で住むことには、大きな安心感があります。

Withは2022年10月にオープンしました。入居者募集はSNSやホームページ、シングルマザー向けポータルサイト“マザーポート※”で行いました。その結果、2023年3月には3戸の部屋は満室になりました。

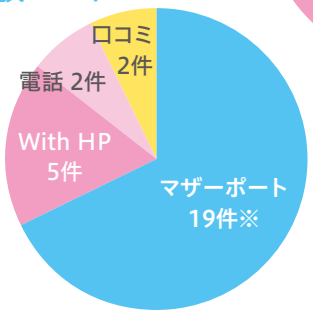
入居の際の面談で多かったのは「夕飯を作る時間に階下の人が来て、子どもの足音の苦情を毎日1時間言われる」「子どもの声を注意された」など隣人からの苦情でした。母と子だけの家庭にとって苦情は大きな不安につながります。そのため、お互いに事情を理解している者同士で住むことには、大きな安心感があります。

鹿児島市・高槻市・神戸市から引っ越してきた方の中には、引っ越しのために支出が増えたことに加え、転居に伴い無職になり収入が途絶えた方もいました。また、着の身着のままで引っ越してきた方もいました。そんな入居者に対して、家財を提供してくださった市民の方や企業がいてくださったのは嬉しかったです。

入居相談者居住地



相談ルート



※マザーポートは、子育て母子ハウスを探すためのポータルサイトです。
https://motherport.net

Point

入居の問い合わせは2025年1月までで35件でした。満室になっている状態でも問い合わせがあり、シングルマザーハウスが世の中に不足していることが理解できました。ただ、相談者には色々な方がいて、最初の問い合わせで連絡が取れなくなるケースや内覧予定日にキャンセルの連絡が入るケースも多く、相談者の精神的な不安が反映している様に思えます。

ある相談者は、子どもに十分な食事を与えられない様子で世帯の困窮状況を訴えていたため、緊急を要すると判断し、居住自治体の生活困窮者窓口を紹介し早急につながるように促しました。

働くことを支える

収入が途絶えない状況を心がけ、伴走支援を行いました。

引っ越しにより無職になった入居者には、入居後すぐにキャリアコンサルタントが「キャリア相談」の時間を設けました。その結果、これまでのキャリアを生かした職に就くことができました。

ある方は介護系の仕事に就きましたが、シングルマザーであることから夜勤ができないため、収入は多くはありません。このことから、シングルマザーの働ける限界を感じずにはおられませんでした。

一方、マスコミに取り上げられると、「歯科衛生士の勉強をしながらアルバイトで勤務しないか」、「シングルマザーに育てられたので自分の店で働かないか」などいくつかのお申し出がありました。しかし、社会保険に加入し生計をなり立てることができずお断りをさせていただきました。

就職してからはその職場に定着できているかを常に確認し、必要に応じて面談を行うなど、収入が途絶えない状況を心がけ伴走支援を行いました。

子育てを支える

多くのボランティアさんが入居している子どもたちを支えてくださいました。

2023年の1年間、阪神シニアカレッジの有志の方が、コミュニティルームを使って週1回子どもたちの宿題を見てくださいました。

家ではゲームの機械を手放さない子どもたちに、折り紙やトランプなどの「子どもたちにとってはあたらしい遊び」を教えてくれました。入居者の中にデッサンの上手な男の子がいます。学習ボランティアさんが「デッサンをもっと学ばせたい」と連絡をくださり、芸術家の先生に見ていただいたこともあります。このように多くのボランティアさんが入居している子どもたちを支えてくださいました。

学校で問題が生じた時は、校長先生と運営者である私たちが話をしたこともあります。市役所の担当課も入り、三者で「この家庭の最善はなにか…」と話し合う体制をとりました。

心を支える

これからの人生に目を向ける会話を行いました。

入居した時に心理士が面談を行い、心理状態を数値化することを試みました。その後、数か月に1回のペースで、1時間の心理的な面談を行いました。職場と自宅の往復や子育てなどで毎日時間に追われる入居者にとって、大人とゆっくり話すという時間は貴重なものです。子どもへの想いや自身の生育歴、これまでの生活や将来の不安など様々な話をしています。この中で大切にしたのは、生まれてからWithに来るまでの自分の人生を掘り起こさず、これからの人生に目を向ける会話を行うことでした。

心理状態の数値化では、当初予想していた良い方向に向かうという結果は現れませんでした。

住まいが安定し食料支援により家計も少し楽になっても、彼女たちにはその時その時の心配事があるように感じます。

さまざまな関係先とつながる

入居者が安心して暮らせるよう、企業や自治体、大学などと連携をしています。

企業とつながる

生活協同組合コープこうべからの食糧支援をはじめ、複数の企業から協力のお声掛けをいただきました。

生活協同組合コープこうべは、「コープさん」と呼ばれるほど県民に親しまれている生協です。そのコープさんが「協同購入センター宝塚で返品になる冷凍食品、冷蔵品、トイレットペーパーなどの日用品をWithに住む人のために活用しませんか？」と提案くださいました。

これまで廃棄していた食品を活用するのでフードロスを減らすことにつながり、それがシングルマザーの生活支援につながる仕組みです。私たちは週2回センターまで食品を取りに行き、コミュニティルームの冷蔵庫に運びます。入居者は、コミュニティルームのドアのカギをスマートフォンで開閉し、自分の状況にあわせて、好きな食品を取り出します。これらの食品は、入居者だけでなくWithを内覧したが入居に至らなかったシングルマザー2世帯にも配布しています。

コープさんの支援はこれにとどまらず、協同購入センター尼崎からも週1回食品を提供いただくことになりました。これにより、Withだけでなく近隣の子ども食堂へ食材提供が可能になり「いただく」から「お渡しする」機能を持つようになりました。

2024年からはH2Oサンタとつながることができ、阪急百貨店に入っているドンクのパンを週1回いただけるようになりました。これらのパンも入居者や子ども食堂の皆さんにお渡ししており、喜んでいただいています。

Point

2024年にJANPIA企画の「関西マッチング会」に参加したところ、多くの企業と話をする機会をいただきました。特に住友ゴム工業は、Withの本棚に設置する本を社員の皆さんに声をかけ、100冊ほど届けてくださいました。

ご寄付いただいた本

自治体とつながる

公営住宅をシングルマザー用住宅として活用するために行政に働きかけをしました。

宝塚市居住支援協議会で、住居確保困難者であるシングルマザーの住宅事情を説明する機会を3年連続でいただきました。その上で、今回は休眠預金を活用して物件を確保できたものの、満室になっても問い合わせが途絶えない状況を説明し、公営住宅をシングルマザー用住宅として活用できないかと行政に働きかけをしました。結果的には「宝塚市の公営住宅は稼働率が高く、シングルマザーに特化することは難しい状況。民のことは民の力で対応してほしい」との返答でした。Withを市民の方々が応援してくださる状況を引き続き伝えていきたいと思います。

協定を結び、入居している子どもたちの家庭や学校での気になる様子を、学校・市の担当課・私たちと三者で話し合う場を設けることができました。

単純に部屋を貸すだけではなく、家庭全体を包み込む支援がこの事業にとって大事なポイントです。
入居している母親は仕事で忙しく、家では家事と子育てを一人でこなさなくてはならない状況です。ゆっくりと子どもと向き合う時間がとりにくいため、誰かが母子の異変に気づき、そーっとサポートすることが大事を防ぐと感じました。

大学とつながる

多くの大学が興味を持って見学に訪れ、コミュニティルームを活用したワークショップも複数回開催されました。

追手門大学、関西学院大学（柴田ゼミ、ハンズオンラーニングセンター）、関西大学（住環境デザイン研究室）、神戸女子大学など多くの大学が興味を持って見学に訪れました。
皆さんのテーマは「シングルマザーの支援」「地域との連携」「古いアパートの活用」「子どもの育ち」など多岐に渡っていました。これまで、私たちの団体は大学の視察は多くなかったので、説明後の質問は大変新鮮で新たな気づきを与えられました。
特に本事業の評価委員である福本先生のご尽力で関西大学住環境デザイン研究室の学生は、コミュニティルームの活用方法にまで踏み込んだ提案をしてくれました。学生とともに行った3回のワークショップの後、2024年3月31日にコミュニティルームを地域に開放し「ただ居間トンカチDay」を開催しました。このイベントを機に、コミュニティルームの名称が「ただ居間」と決まりました。コミュニティルームを様々な方々に活用いただき、子どもたちが「ただいま」と帰れる居場所とするための本棚ベンチもこのイベントで完成しました。
今では、この本棚に住友ゴム工業の社員の方々のご寄付による100冊の児童書が収まっています。

持続可能な運営を目指す

これからも変わらずに運営を続けていけるよう、運営団体が行っている取り組みをまとめました。

お金を工面する

この事業を自立させていくには寄付や助成金にばかり頼るのではなく、資金が回る仕組みを考えなくてはなりませんでした。

このプロジェクトは休眠預金が無ければできませんでした。と言うのは、大きな資金を動かして新しいプロジェクトに挑戦した経験のない私たちにとって、シングルマザーハウスは世の中に必要なことであっても、取り組むには躊躇する大きな事業だったからです。しかしタイミング良く、古民家を社会的課題（シングルマザー支援）に活用することをテーマにした公募を見つけました。宝塚にシングルマザーハウスを作りたい思いから申請を行い、全国で採択された６団体のうちの１団体として、助成金1,950万円をいただけることになりました。

このお金に自己資金870万円を加え、全体で2,820万円の事業となりました。休眠預金の仕組みが私たちの背中を押してくれたことは明らかです。

ところが、築50年の建物の耐震化とリノベーションには思いのほか資金がかかることとなり、宝塚NPOセンターの支援者に寄付の呼びかけをしました。

その結果70余名の方々から111万円の寄付をいただくことができました。

事業が本格的にスタートすると、新聞で知った方や宝塚NPOセンターの会員さんから「Withに役立ててほしい」と寄付をいただくことが多くなりました。

しかし、この事業を自立させていくには寄付や助成金にばかり頼るのではなく、資金が回る仕組みを考えなくてはなりませんでした。とはいえ、家賃を高い値段設定にするわけにはいきません。私たちはこのアパートを10年間のサブリース定期住宅賃貸借契約をしています。この契約を「世の中のためになるのなら」と破格の値段で結んでくださった大家さんがいてくださるからこの事業は成り立っています。

不動産を社会課題に活用するということが、社会的により大きなものになるように、Withで起こる良い変化を社会に発信していきます。

リノベーション前のWith

リノベーション後のWith

つながりをつくる

これまで私たちが出会うことのない方々と、つながることができました。

他の事業で宝塚市内の地域コミュニティ支援をしていたので、「地域のつながり＝代表者とのつながり」と考えていました。しかし、この事業を通じて多くの方と知り合えたことで、「地域のつながり＝その土地に普通に暮らされている多くの皆さんとのつながり」なのだと改めて感じました。

新聞各紙やネットニュースに「宝塚市内にNPOがシングルマザーハウスを作った」と掲載されると、「自分の店を就職先の1つにしないか」「宝塚市内に家を持っているので活用しないか」など、多くの方が声をかけてくださるようになりました。

コミュニティルームを作った影響もあります。大学生の発案で「ただ居間」と名付けられたこの部屋では、夏休みに地域の方々の協力を得て「縁日」を実施しました。「縁日」の運営は民生委員さんやPTAの方々など、これまで私たちが出会うことのない方々です。

これを機に2024年12月からはPTA有志のママ達を中心に夕方からの地域食事会「おかえり食堂」を、2025年5月からは朝食を食べてから登校する子どものため、民生委員さんを中心に「いってらっしゃい食堂」がスタートします。私たちが直接動くことなく、場を用意し、準備を少し手伝うだけで「ただ居間」は地域のネットワークづくりの場として動きだしました。同時に、私たちを地域と結びつける役割も担ってくれています。

行政を巻き込む

「できること」と「制度を活用すること」の見極めが重要でした。

この事業の申請に行政の推薦状が必要だったため、宝塚市の各部署に説明に伺いました。住まいに関することは都市整備部、シングルマザーの所管は子ども未来部、NPOやまちづくりを所管する市民交流部です。皆さん快く応援してくださいましたが、考えてみると、行政の中では各部署が担当する内容がWithの中では流動的に動いています。そのため、宝塚NPOセンターはそれらをまるっと担わなければなりません。「私たちができること」と「行政に相談し制度を活用すること」の見極めが重要でした。

入居者の子どもに関して行政に相談をした際に「要保護児童対策協議会」への加入を勧めていただいてからは、学校・行政・宝塚NPOセンターの話し合いがスムーズにできるようになりました。

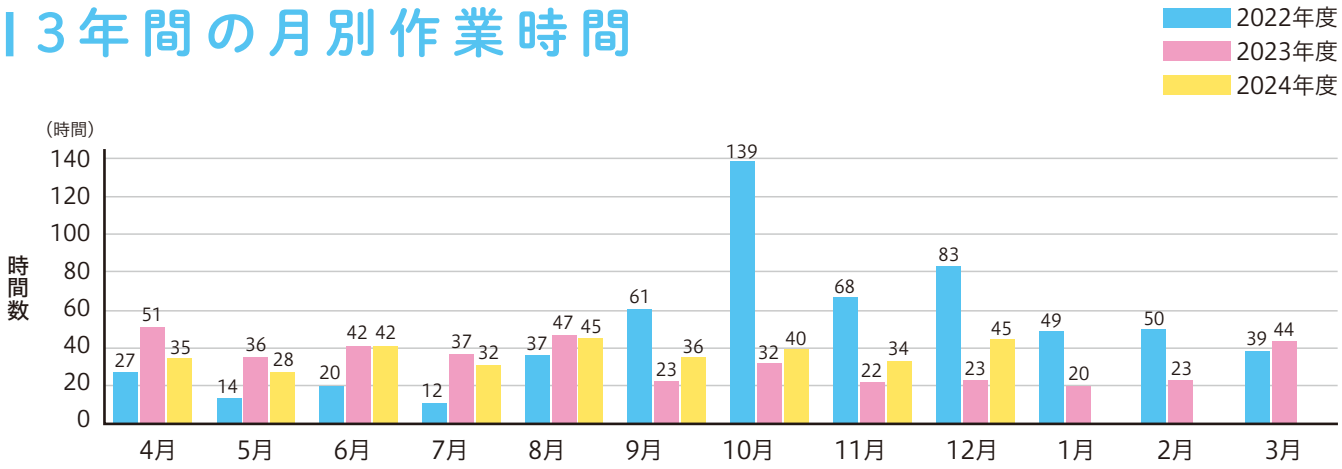
チームで取り組む

この事業が宝塚NPOセンターを1つにしてくれたように思います。

「子どもたちにきれいな部屋を用意したい」との思いから修繕費がかさみ、この事業では人件費を予算化ができませんでした。しかし、多岐にわたる支援を宝塚NPOセンター内で完結できたのには理由があります。就労支援を担当しているキャリアカウンセラーは、必要に応じて行政の制度に明るいスタッフを交えてミーティングを行いました。心理相談を担当している心理士も気になることがあれば、キャリアコンサルタントや事業責任者とともに話し合いをしました。入退室の手続きや保険請求などは総務担当が行い、イベント時には多くのスタッフが関わりました。Withは就労支援やまちづくり、居住支援と宝塚NPOセンターの強みを発揮できる事業だったので、チームで取り組むのは難しいことではありませんでした。

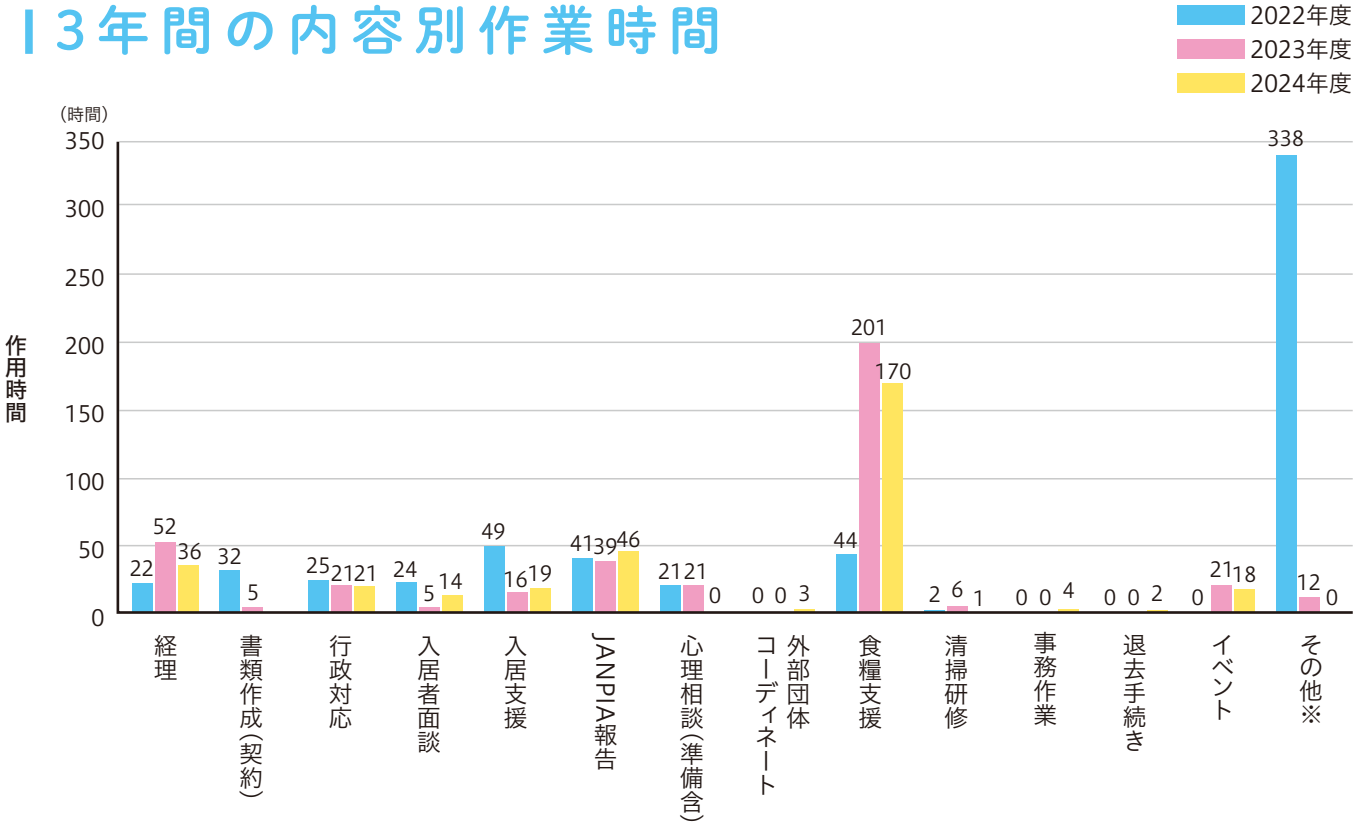
コラム1　Withを運営するコストについて

13年間の月別作業時間



2022年度／計598時間　2023年度／計399時間　2024年度／計340時間　2022年4月～2024年12月までを集計

13年間の内容別作業時間



※2022年度の「その他」は、監視カメラの設置や鍵の交換等、準備段階で必要かつ他の項目に振り分けられないものが割り当てられています。

コラム2　全国の母子家庭の状況について

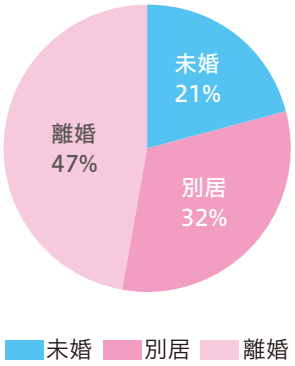
婚姻状況

婚姻状況は、離婚した人が47%、別居中の人が32%、未婚が21%となっています。

婚姻状況

未婚	44	21%
別居	68	32%
離婚	101	47%
合計	213	

婚姻状況



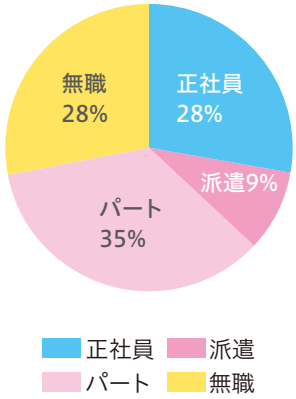
就労状況

就労状況は「パート」が一番多く35%、「無職」とあわせ63%。「正社員」や「派遣」はあわせて37%になります。

就労状況

正社員	79	28%
派遣	25	9%
パート	98	35%
無職	77	28%
合計	279	

就労状況



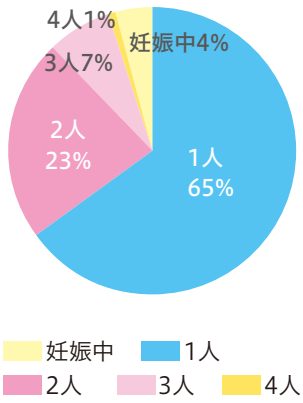
こどもの人数

こどもの人数は「妊娠中」または「1人」の人が7割近く、「2人」が23%、「3人」以上の家庭は8%になります。

子どもの人数

妊娠中	11	4%
1人	183	65%
2人	66	23%
3人	19	7%
4人	2	1%
合計	281	

こどもの人数



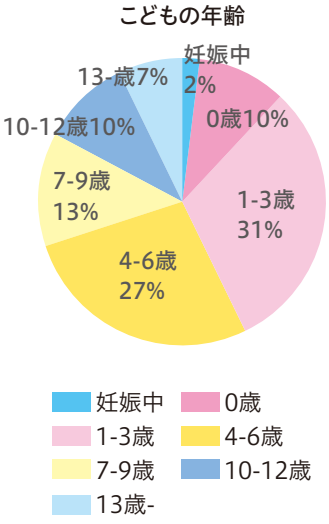
こどもの年齢（2022年度）

こどもの年齢は「1～3歳」が31%、「4～6歳」が27%、「0歳」「妊娠中」も12%と小さいこどもを抱える人が多い状況です。

子どもの年齢

妊娠中	6	2%
0歳	36	10%
1-3歳	111	31%
4-6歳	96	27%
7-9歳	48	13%
10-12歳	35	10%
13歳-	26	7%
合計	358	

こどもの年齢



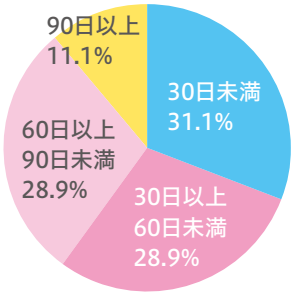
問い合わせ～入居までの期間

問い合わせ～入居までの期間は「60日未満」が6割と非常に短期間で入居に至る傾向があります。

問い合わせ～入居までの期間

30日未満	14	31.1%
30日以上60日未満	13	28.9%
60日以上90日未満	13	28.9%
90日以上	5	11.1%
合計	45	

問い合わせ～入居までの期間

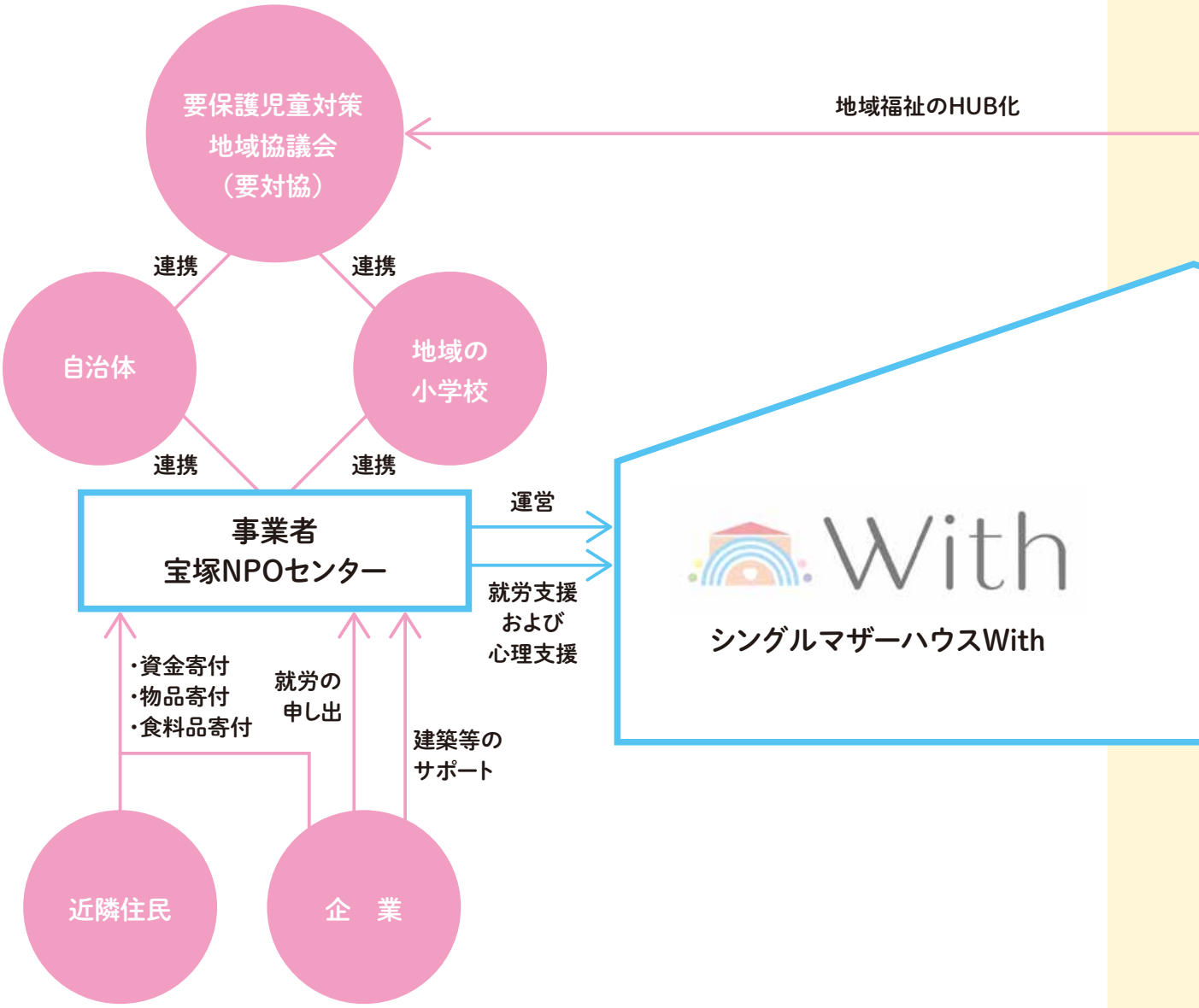


上記データは、NPO法人全国ひとり親住居支援機構が運営する「マザーポート」にこれまでお問い合わせをいただいたシングルマザーの婚姻・就労状況やこどもの人数・年齢、就労状況との移動距離との相関などについての情報を引用したものです。
※（2022年度）の記載があるもの以外は、2023年度の情報。

ステークホルダーマップ

Withをとりまく関係図を1枚にまとめました。数多くの方々が協力をしてくださっています。

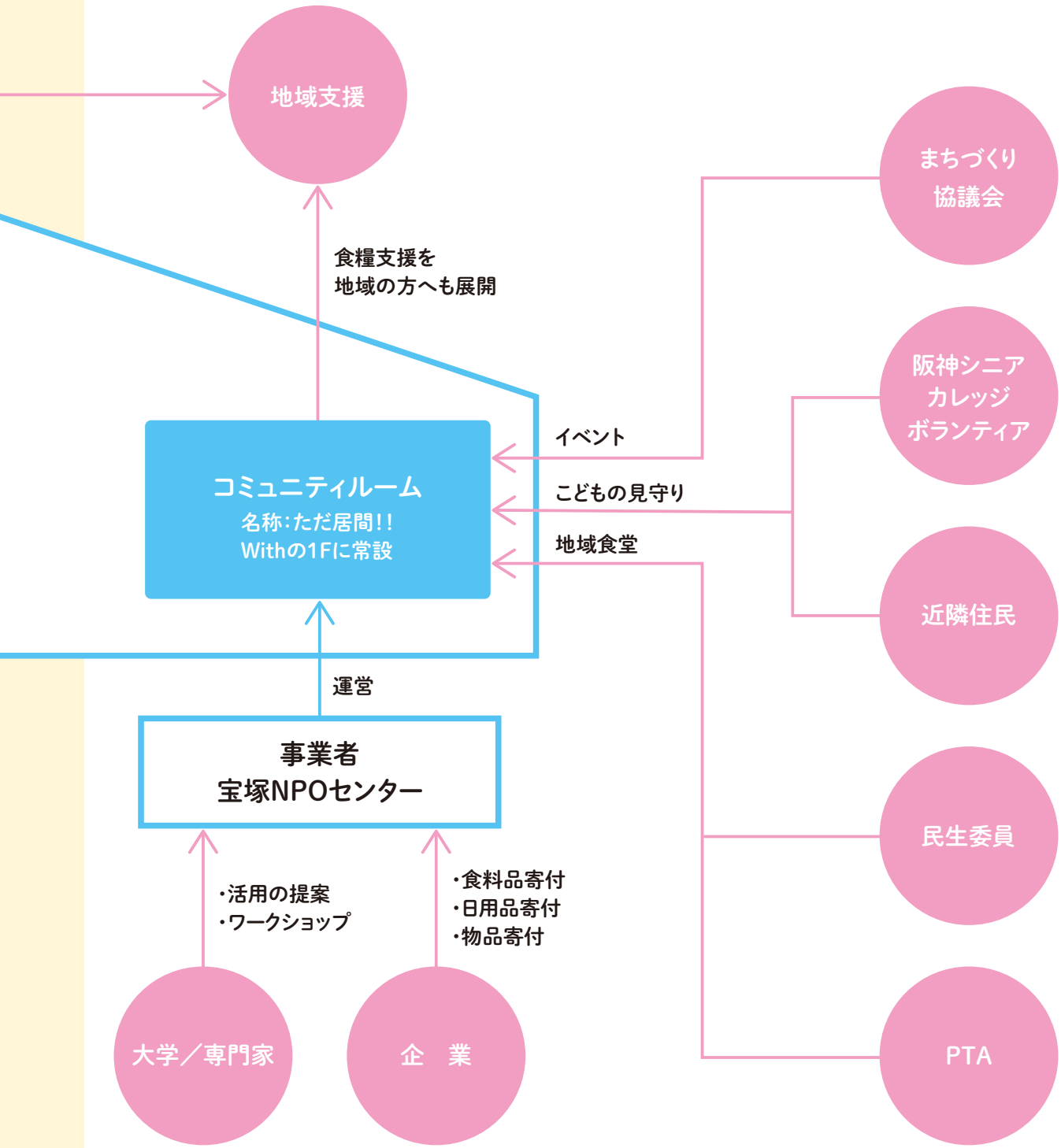
With運営関連のステークホルダー



及び ⟶ は、Withスタート時のステイクホルダー

● 及び ⟶ は、Withスタート後に新たに加わったステイクホルダー

コミュニティルーム活用関連のステークホルダー



Withとかかわる

Withにかかわっていただいている皆さまからのコメントを、分野別にまとめました。

企業からの視点

生活協同組合コープこうべ

第1地区本部長　前田 裕保さん

かかわるきっかけ

元々、宝塚NPOセンターさんとは、地域の中の企業同士としてのつながりを持っていました。弊社で協力していた別の地域でのシングルマザーハウスや公営住宅を活用した居住支援に取り組む中で、食糧支援を展開していて、Withにも何か役立つことがあるのではないかと、お声がけしました。

協力するための運営実態

コープでは、誤発注品や入院等による急なキャンセル等により食料品の廃棄が行われていました。食品の安全性や転売されるリスクもあるのではないかと、転用はしていなかったのですが、神戸市で行われている子ども食堂への支援をきっかけにフードシェアリングを始めていました。現在では、継続的に運営できる地域支援の取り組みとして社内のしくみになっています。

かかわるメリット

コープにとっては、将来の世代に「助け合いの心」が広まることが、メリットだと感じています。「助け合いの心」は、コープという存在にとって非常に重要な中心的な考え方ですが、こうした精神性はどのような環境で育ったかということも重要だと思います。Withのように、様々な支援を受け自立する経験を経た子どもが、こうした「助け合いの心」を持ってくれることが、将来のコープにとっても大切なことだと考えています。
また、廃棄処分費なども幾ばくかは減っているはずで、コストダウンになっていると思います。結果的に環境問題に取り組むことができる点も良いと思います。

かかわる社会的効能

生活困窮に対する様々な支援の体制、制度が整ってきていることは、間違いないと思います。加えて、公的な支援は入居することや生活費補助すること等の具体的な支援に届いた時点で完了するが、実際は入居してから自立するまで伴走することが最も重要な価値提供であると考えます。世代を超えた困窮の連鎖を断ち切るためにも、生活再建の支援は重要だと思います。

コミュニティルームの存在意義に対する評価

コミュニティルームがあることで、地域との関係性が残ることが重要だと思います。「おはよう」や「こんにちは」という挨拶も重要だけれど、「いってらっしゃい」や「おかえり」という挨拶は、関係性が変わってくるのだと感じます。距離の近さや空間のシェアはこうした変化を生み出していると感じるし、社会性のある子どもを育むことができるのではないかと思う。こうした、媒体になれる人の存在が重要だと思います。

運営上の課題

運営情報を一定の地域の運営協力者と共有することが必要なのではないか。コープのような組織はもう少し広域でこうした支援者のネットワークを作ることができると思うので、運営情報を共有してもらえば、現状よりも的確にWithの運営支援をできるのではないかと感じます。

株式会社ナビック

会長　仲内 悦治さん

かかわるきっかけ

宝塚NPOセンターさんとは、中小企業家同友会で知り合っており、当社も宝塚NPOセンターの法人会員です。ロータリークラブ等で社会奉仕活動の現場にも参加していて、企業として工務店という業種の枠を超えて、地域に根差した活動をしたいと考えていました。そんなときに、Withの話を聞いて改修工事に参加しお手伝いすることになりました。

協力するための運営実態

社会福祉事業として請負しているので、一般的な請負と比較すると安価に改修工事を提供することができていると思います。また、こうした協力は事業規模が大きくなりすぎると、請負側のリスクも大きくなるので、難しくなります。しかし、今回はリノベーション事業でしたので、支援に取り組みやすかったという実情もあります。

かかわるメリット

Withの支援をすることで、自社の社会貢献活動の具体化ができている点がメリットであると感じています。地域の中小企業による社会貢献活動というのは、その方法論が明確でない中で、こうして具体的に見える形で支援できている点は、当社にとっても有用なことだと感じています。

地域からの視点

民生員 盛田さん
高司小学校区まちづくり協議会 津国さん
高司小学校PTA 辻野さん

かかわるきっかけ

小学校の運営委員や民生委員、PTA活動をする中でWithの話を聞きました。現地見学会の形でWithを見た方や、コミュニティルームで行われた服の交換会に顔を出したことがきっかけでWithを知った方など様々です。

協力するための運営実態

まち協や自治会、民生委員はつながりが強いので、何かあれば支援に動くネットワークがあります。決して、自分が旗振り役として活動できるという市民が多いわけではないですが、困った人がいれば積極的に支援に参加したいという地域の住民は多くいます。こうした市民にうまく役割を伝えることができれば、より多くの地域住民が参画できると思います。

かかわるメリット

“自治会離れ”のような、地域コミュニティに属さない住民も生まれ始めている中で、コミュニティルームを活用することで、こうした住民へのアピールにもなるのではないかと思います。加えて、何か活動したいと考えている地域住民は多くいるので、コミュニティルームを一つの活動のフィールドとして捉えられる点は、地域にとっても大きなメリットになると感じています。

かかわる社会的効能

シングルマザーハウスは、当事者が安心して暮らせる環境を提供できているという点でとても重要な役割があると感じます。地域の中にもシングルマザーの方は多くおられるので、以前からこうした支援の必要性を感じていました。また、シングルマザーとして子育てをする経験者からも、多様な支援がセットになったシングルマザーハウスの存在は重要だと感じるとの意見があります。

コミュニティルームの存在意義に対する評価

〇〇Dayといった「外から見える」活動はとても重要だと思います。子ども達にとっても寄り添ってくれる場だと感じられるのではないかと思います。また、多様な人が混ざり合った状態でいられることも良いと感じます。誰かを特別扱いする必要がなく、良い存在だと感じます。居場所として選べる環境に育ち始めていると感じています。それに、コミュニティルームがあることで、私自身も「おかえり食堂（地域食堂）」を運営しようと考え、実践につなげていけると感じています。

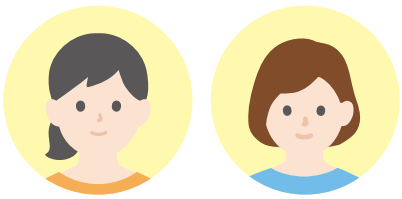
これからの可能性

子どもが楽しいと、親はうれしいものだと思います。コミュニティルームは、そうした場になることができると思います。地域住民が世話人的に参画することでより広まっていくのではないでしょうか。そうした場になれば、まち協としても、より支援がしやすいと感じます。

学生の視点

関西学院大学

ハンズオン・ラーニングセンター（HoLC）の皆さん



かかわるきっかけ

大学でHands on Learning Programという授業を受け、その指導教官の先生から、Withの話を聞き、「トンカチDay」があったので、その機会に参加しました。

協力するための運営実態

自分たちは学生なので、その“学生”という特徴を活かすことはできているのではないかと感じています。地域コミュニティには、働く世代や若い世代が参加しにくい事情があると思うが、そうした世代と既存の地域コミュニティに参画する世代との懸け橋のような存在になれるのではないかと思っています。

かかわる社会的効能

宝塚NPOセンターが入居者さんと日々ちょっとしたやり取りをしているのを見て、「心のつながり」を作り出している点がすごいなと感じました。自身も西宮で一人暮らしをしているので、何かあったら相談できそうと感じられることは、必要な役割だと感じます。

コミュニティルームの存在意義に対する評価

コミュニティルームのような常設の場があることは、何度も、いつでも、誰かと関わる機会を作れるということだと思います。回数を重ねる中で関係性を築くことができると思うので、常にある場所があるという価値は大きいと感じます。

これからの可能性

私たちのような学生が継続的に関わり、多様なイベントをアジャイル型で実装していくことで、Withが地域とつながることに対して貢献できるのではないかと思います。また、そうした取り組みを見せていくことは、地域にも波及する効果があるのではないかと感じます。

運営者内部からの視点

宝塚NPOセンタースタッフ

運営の実態

コミュニティルームがあることで、心理相談をWithで行えたという点がとても良かったと感じています。継続的な面談も断られずに続いたという点からも、入居者さんにとっても心理相談は必要な要素だったのだと感じています。

また、Withに入居しているみなさんにとっては、生活の立て直しを行う時期なので、食糧支援はとても支えになると感じました。さらに、食糧支援の機会などを通じて、宝塚NPOセンターの職員との接点を持つことで、人間関係が閉じずにいられる点も良い点だと思います。

副次的メリット

宝塚NPOセンター内の他の事業と連携を図れることはメリットだと感じます。例えば、清掃事業のメンバーがWithの清掃を行っており、こうした事業連携は他部署の人にとっての当事者性をつくるという点でも有用だと感じます。

社会的効能

心理支援、食糧支援があるというのは、入居者にとってとても大きな効能なのではないかと運営しながら感じます。また、入居者から「ちゃんと大人（他人）と会話する機会がないので、そこに価値を感じる」という声ももらいます。

また、様々なトラブルに対して対応していく中で、行政（子ども支援課）に通報が入った段階で、情報共有される存在になっていることや、要保護児童対策地域協議会へ参画していることなど、子どもの支援のためのネットワークの一員になっている点も重要な社会的価値であると考えています。

コミュニティルームの存在意義に対する評価

面談の場所として、良かったと感じます。コミュニティルームは、家ではないけど、外でもない、ホーム感のある場所なのだと思います。内面を話しやすい環境を作り出せていると思います。

また、どのように使ってよいかわからない段階で、トンカチDayを開催して具体的な使い方のイメージがついたのが、以降のイベントを実施できたきっかけになったと思います。縁日Dayなどの具体的なイベントを通じて、支援や活動の輪が地域で広がっていることを実感することができました。結果的に食糧支援をWithだけに閉じず、地域の高齢者に対しても展開することができるなど、具体的な広がりも実感しています。

運営上の課題

心理相談は、効果があると思うが、同世代の女性であることは必要な条件かもしれないです。また、子どもを育てているかどうかもポイントだと思います。小さな子を育てる立場だと、シングルマザーのみなさんが先輩だったりするので、支援する側される側という立ち位置が不明瞭になって、良い効果が生まれると思います。定期的にしっかりと話を聞く環境が大切だと思いますので、そうした人材の継続的な確保が課題となると思います。Withを中心とした社会的なネットワークの組織内での展開も必要な課題だと思います。属人的にならず、しっかりとWithと地域がつながることができる体制づくりも重要だと思います。

そして、賃貸住宅を経営しているので、将来的な修繕費等のコスト、安定的な経営については、まだまだ課題があると思います。様々な支援を展開するためにはコストもかかるので、しっかりと経営しつづけられるマネタイズの重要性があると思います。

これからの可能性

コミュニティルームのさらなる利活用が、地域でのネットワークを広げ、より強固なものとなり、結果的に地域の人的ネットワークのHUBになるのではないかと思います。

With photo gallery

Withで行われた、イベントやワークショップの様子などをまとめました。

ただ居間トンカチDay 2024.3.31

縁日Day 2024.8.22

評価委員さんからのコメント

With運営の外部評価委員さんから事業の振り返りコメントをいただきました。

Withにつながる母子が、「人を信頼してもよい」という感覚を回復するためにも、そして、地域の人のつながりが生まれる拠点として人と人のつながりを生み出していくためにも、息の長い事業になることを願ってやみません。

立命館大学 産業社会学部人間福祉専攻教授
石田 賀奈子

家庭生活は、私たちの成長、発達や健康の基盤でありながら、住環境への支援については家族間の関係性の重要性ほど着目されていません。そうした社会の脆弱さは立場の弱い人のところに困難として現れます。住まいは生活の基本でありながら、「収入が不安定」「保証人が確保できない」など、経済的側面や人間関係の側面で不利を抱えやすいシングルマザーにとっては安全で安心できる住環境の確保は非常に困難を伴います。

家庭内暴力などの家族内での問題は、被害者がその状況から逃れるという選択を取らざるを得ないことが多く、被害者は社会や人間への信頼感を損ない、また多くの人間関係を失った状態で住み慣れた地域を離れざるを得ないことが少なくありません。

私たちソーシャルワーカーは、人と環境の接点に働きかける専門職ですが、Withが目指す短期目標のひとつ「入居した母子が、きめ細やかな支援により職業自立をしている状態を維持することで生活基盤を整え、前向きな状態になる」、それを実現するためには、様々な資源との連携が必要なのです。

Withには様々な方が集まります。地域に根差した活動をしてこられた中山さんや木本さんに引き寄せられるようにしてかかわるようになった私もその一人として活動の様子をうかがってきました。様々な仕掛けは、「地域でのシングルマザーハウスの普及」のためでもありますが、Withを利用している母子が、ここを安全の基地として地域に溶け込み、やがてここでの生活を通して社会が安心で安全な場であることを確認し、母子が次のステップへ進むための支援でもあります。Withにつながる母子が、「人を信頼してもよい」という感覚を回復するためにも、そして、地域の人のつながりが生まれる拠点として人と人のつながりを生み出していくためにも、息の長い事業になることを願ってやみません。そのためには、内部の基盤強化や維持も大切ですが、母子を何層にもわたって支援する社会のネットワークが必要です。住まい、暮らし、働く、学ぶ…、この社会の中で困難を抱えながら生活する人々に、様々な場面でのご支援を検討くださる方が増えていくことも期待しています。

地域の新しい展開に自分のできる範囲で何かしら手伝いができたらと思っています。

DAMAYA CONPANY 会長　木本 秀己

休眠預金申請にあたって物件を探していた宝塚NPOセンター理事長から「どこか知りませんか？」と連絡を受けたことがこの事業に関わる始まりでした。最初は思い浮かばなかったのですが、自宅隣に古いアパートがあることを思い出しました。早速、大家さんの自宅に行き「人助けのために不動産を利用したらどうか」と話をさせてもらいました。というのは、自分の所有している不動産で「まちづくり」をしているという意識があったからです。

「大家業」の難しさや楽しさを知っているので、Withが動き出してから評価委員としての手伝い以外にも関わらせてもらっています。例えば、宝塚NPOセンターとは新しい入居者は挨拶に来てもらうように約束をしています。そのことによって、隣のおじちゃんとして入居者に声がけがしやすくなります。子どもたちを見かけた時にも「おはよう」「どこ行くんや」と声掛けをします。返事はあったり無かったりですが、自分に声をかける大人が近所にいることが大切だと思っているからです。

地域の子どもたちが集まる「縁日Day」時には、我が家のガレージを自転車置き場にしてもらうなど協力させてもらいました。地域の新しい展開に自分のできる範囲で何かしら手伝いができたらと思っています。

Withはインクルーシブな地域社会の拠点になれると感じています。

兵庫県立人と自然の博物館 研究員　福本 優

私は、街の視点から“コミュニティルームを地域に開く”ことを目標にお手伝いをさせていただきました。持続的な地域のコミュニティ拠点をつくることは、とても難しいものです。コミュニティ拠点と聞くと、習い事ができたり、自治会の寄り合いができたり、様々なイメージを抱かれると思います。地域のコミュニティ拠点にとって最も重要な要素だと感じているのは、“誰でも居られること”なのではないかと思います。習い事がなくても、寄り合いがなくても、ふとした時に訪れたくなる場所。それが、地域のコミュニティ拠点だと思うのです。Withでの様々な取組は、地域のコミュニティ拠点となるにふさわしいものだと思います。

今後も、多様な人たちにより、多様な方法で利活用されることで、支援“する”側、“される”側の区別もなく、ごっちゃに居られる場所化していくことでしょう。そうしたプロセスを積み上げて、本当の意味でインクルーシブな地域社会の拠点となれるように、私も微力ながらお手伝いできればと思っています。

Withのこれから

宝塚NPOセンター理事長の中山が、Withのこれからと運営を通じて感じたことをまとめました。

Withのこれから

Withの未来は、宝塚NPOセンターと「ともに」活動したいと思ってくださる方々が、もっともっと増えていくことで、さらに拓かれると考えています。

Withのこれからには、私たちがまだ想像もできないような、素敵な展開が待っている気がしています。

なぜそう感じるかというと、今のWithが、2022年10月にオープンした時に夢見ていた姿を、はるかに超えているからです。

シングルマザーの方々を応援したい、そんな想いから始まったWithですが、地域の皆さんが一緒になって動いてくださるようになってから、その歩みはどんどん加速していきました。そして、いつの間にか地域全体に目を向けた、もっと大きな活動へと変化していきました。

「With」という名前には、入居者の方々と「ともに」、そして地域と「一緒に」という願いを込めています。まさに、その名前の通り、ともに力を合わせて進むことができています。

休眠預金の助成期間が終わった後は、正直なところ、運営資金の面で少し大変な時期が来るかもしれません。でも、今までWithを支えてくださった皆さんの温かい気持ちが、きっと私たちを助けてくれると信じています。

シングルマザーハウスを運営して

入居者の方々は、一人ひとり、本当に様々な事情を抱えていらっしゃいます。もし、その事情が社会のひずみから生まれてしまったものだとしたら、私たちにも責任の一端があるのかもしれません。

Withを始めた頃は、「果たして、入居したいと思ってくれる方はいるのだろうか」と、不安でいっぱいでした。ところが、ありがたいことに、3年間で30件を超えるお問い合わせをいただきました。

「満室です」とお伝えしても、なおお問い合わせが続く状況を見て、シングルマザーの方々が家を探すことの大変さを、改めて実感しました。皆さん、ただ家を探すのが大変なだけでなく、同じように頑張っているママたちと、お互いに支え合いながら暮らしたいという気持ちも強く持っているようです。

遠くから新しい土地へ引っ越してくる方々にとって、同じ境遇の仲間がいるコミュニティは、きっと心の支えになるのだと思います。Withがここまで大きなトラブルもなく運営を続けられているのは、それぞれのプライベートな空間を大切にできるアパート型にしたことが、大きな理由だと感じています。

この事業は決して採算の取れる事業ではありませんが、私たちが取り組むべき事業だと思っています。

ご寄付のお願い

Withの活動を今後も変わらず続けていくために、ぜひお力添えをお願い申し上げます。

頂いたご寄付は、シングルマザーハウスWithへの支援として活用をさせていただきます。

オンライン

宝塚NPOセンターのHPからお振込いただけます。詳しくは下記URLまたは右の二次元コードを読み込んでください。

https://hnpo.net/payment

郵便振込

加入者名義：宝塚NPOセンター
口座番号：00930 - 8 - 77117

ご寄付される際のお願い

ご寄付をいただく際には、Withへのご寄付ということを記入いただきますようお願い申し上げます。

オンラインの場合

通信欄に“Withへのご寄付”と
ご記入ください。

郵便振込の場合

決済者情報内の備考欄に
“Withへのご寄付”とご記入ください。

Withの活動を支えてくださっている企業さま

イケア・ジャパン株式会社

H2Oサンタ

Canon キヤノンマーケティングジャパン株式会社

コープこうべ

住友ゴム工業株式会社 SUMITOMO RUBBER INDUSTRIES, LTD.

NAVIC 株式会社ナビック

FELISSIMO

シングルマザーハウス With事業報告書
発　行　日：2025年3月　　発行責任者：中山 光子
制　　作：中山 光子、福本 優
評価委員：石田 賀奈子（立命館大学）、木本 秀己（DAMAYA CONPANY）、福本 優（兵庫県立人と自然の博物館）
デザイン：rashisa inc.
発　　行：認定NPO法人 宝塚NPOセンター（〒665-0845　宝塚市栄町2-1-1 ソリオ1-3F）

認定NPO法人
宝塚NPOセンター
TAKARAZUKA NPO CENTER

〒665-0845　宝塚市栄町 2-1-1 ソリオ 1-3F
TEL：0797-85-7766　FAX：0797-85-7799
Mail：zukanpo@hnpo.net　URL：https://hnpo.net

舞い上がれ
社会を変える
みんなの力
休眠預金を活用した事業です